

いかなる乱臣賊子も国土の中に生きています。陛下のみ恵みの中に生かされている。このみ恵みの中に生かされつつ、み恵みに反逆し、み恵みを私し、私利私欲に囚われて、乱臣賊子となるのである。であるからみ恵みをはなれては不忠はあり得ない。み恵みへの反逆を離れては、乱臣賊子はあり得ない。

どんな六道輪廻の悪衆生も、如来の大慈悲を出でてはいない、如来は、衆生が信じて出て来るのでもなく、衆生が逆いたからとて消えるのでもない。如来の真実だけは衆生の信謗を超えて実在します。

であるが故に、罪悪は如来をぬきにしては考えられない。大慈悲の中にあつて、大慈悲に反逆するのである。振り上げた邪見の刃は、自らの心臓をさすと共に、如来のみ胸をさしている。衆生の我慢にさされていよいよ白熱するものもまた大慈悲である。

であるから浄土門に如来を疑うことを根本の罪悪とされる。

臣民は、陛下の稜威の中に生かされていて、その大御心に順ひ奉つて、皇運を扶翼し奉るか、あるいはまた反逆によつて大御心を悩まし奉るか、どちらかである。

衆生の如来に於けるまた然りである。如来の大慈悲に帰して、その内的眷族となるか、疑惑により、逆謗によつて、如来をはなれて六道輪廻するかである。

「兵に告ぐ、勅命は発せられたのである。すでに天皇陛下の御命令が発せられたのである。お前たちは上官の命令を正しいものと信じて絶対服従して誠心誠意活動してきたであろうが、すでに天皇陛下の御命令によつてお前たちは皆原隊に復帰せよと仰せられたのである。この上お前達はあくまでも抵抗すれば勅命に反抗することとなり、逆賊とならねばならぬ。正しいことをしたと信じていたのにそれが間違つていと知つたならば、徒らに行掛りや義理上からいつまでも反抗的態度をとつて、天皇陛下に叛き奉り、逆賊として汚名を永久に享けるようなことがあつてはならない。今からでも決して遅くはないから、直に抵抗をやめて軍旗の下に復帰せよ。そうしたらば今までの罪も許されるのである。お前達の父兄はもちろん国民全体もこれを祈っている。本日（二十九日）速に現在の位置を捨てて帰つて来い。」

これは、香椎戒嚴司令官の反乱兵に対する諭告である。読む者、誰か涙なきを得ようか。

諭告はそのまま大御心の伝達である。

「帰つて来い！」叛ひを受けさせたもうものも、大御心であり「帰つて来い」と宣すものもまた大御心である。そこに我が国がある。

「南無阿弥陀仏」とは、み親の名ではあるが、同時に、大慈悲の表現であり「帰り来れ！」との招喚の勅命である。しかもその悲痛なる招喚の声は、五逆謗法の衆生の上にもそゝがれてある。叛く者にそゝがれる大慈悲のすべてである。

「帰る」ということ、それは懐しい世界の表現である。子が親心に、他郷より故郷に、国民が大御心に、衆生が如来の大慈悲に帰つてゆく純な心なるが故である。

帰る心、それはそのまゝ道を見出した心である。道に迷える子はみな帰らなくてはならない。

本部の例会では、今頃は和讃の龍樹章を頂いている。

龍樹菩薩は、大智度論、十住毘婆沙論等の著者であり、いわゆる千部の論師である。印度に於ける仏教の大黒柱であり、大聖者である。

学問により、徳により、智慧による限り、何人も追従を許さない權威である。しかるに、大士には一面念仏の世界があつた。誰にでも出来る念仏の世界があつた。

龍樹は、信方便の易行によつて速すみかに、正しく、菩薩の不退転地を求める者を、怯弱下劣の輩であつて、丈夫志幹ではないと叱責、呵責しつつ、しかも必ずこれを求めんとするならばとて、聖道難行の世界において不退転地に入ることの容易ならぬことを示し、念仏の世界の入り易きことを水道の乗船に譬えられた。

かくの如く、念仏の世界を求めるものを、怯弱下劣、寧弱怯劣、おとりはてた弱虫と呵責しつつ、しかも、龍樹そのものが念仏に帰して「我今、身口意をもつて合掌し稽首し礼しまつる。」と言ひ、「我常に念じまつる。」と言ひ、「我今帰命し礼しまつる。」と告白せられている。

大哲龍樹は真に巍巍たる高峰であつて、一文字をも知らぬ老婆などは如何にしてもついに及ぶ所ではない。

しかるに、その菩薩には一面、いかなる者へも通ずる世界がある。即ちいかなる愚者悪人にも同じて一味になりたもう念仏の境地があつた。怯弱下劣と叱つた大士が、2 そのま怯弱下劣の世界に下つて念仏せられたのである。

かるが故に無我に念仏申す限り、大地に合掌して、自らの怯弱下劣を深信して如来の本願に帰する限り、いかなる愚者、悪人といえども、龍樹大士と一味一体となり得るのである。

高き一面を有もちつゝ、同一に万人の帰り得る通路を開き、万人の世界に下りて万人を懐く者、即ち聖者である。表も裏も低いものは凡夫であり、表も裏も高いものは二乗である。表も高く裏も高い、外面も高く、内心も高きものは、高慢なる独覚である。

菩薩大士は高ければ高いだけ、低い一面を持ち、万人の帰り得る通路を持つ。

大君の側近に侍して、輔弼ほひつの重責にある者は、常に尊重の一面を持ちつつ、同時に下万民をして大御心に帰らしめる通路たらねばならない。大君と、百姓との間にあつて、百姓をして、大御心に帰らしめる道を開くことこそ、臣たるものの道である。(聖徳太子、十七条憲法を拝読すべし)もし臣たる者、その権力を私し、横暴を振ひ、私利私欲によつて、上御一人の聖明をおおい奉り、下百姓を虐げるが如きことあらば、由々しき大事をまきおこすであらう。

親鸞聖人、和讃に曰く

「智度論にのたまはく 如来は無上法皇なり

菩薩は法臣としたまいて 尊重すべきは世尊なり。」

菩薩は法臣である。如来と一切衆生との間にあつて、衆生をして如来に帰らしめる通路となるもの即ち、法臣たる菩薩の使命である。されば、菩薩は必ず、合掌稽首し

て、まず如来に帰し、それを通して一切衆生を代表し、背負い、万氏の罪を我が罪として、如来に懺悔し慚愧するのである。

民も、もし勅命によつて朝家の公器に任ずる時、臣となるのである。臣民はもとより一である。

一切衆生もまた真実に如来に帰して、その本願に生きる限り、菩薩となるのである。たとえ八万の法蔵を知るとも、聖意に帰せざる限り、六道輪廻の悪衆生であり、如来のみに生きる限り、老婆といえども如来浄華の衆として尊ばるべきである。世間にあつては大御心、出世間にあつては如来心、聖意に帰るべきである。